

目次

いあいさつ

例言

第一編 原始古代編

第一章 旧石器時代 — 最古の狩人 —	3
---------------------	---

序 — 市内の研究の歴史 —	3
----------------	---

第一節 火山灰層序と時期区分	5
----------------	---

火山の噴火と関東ローム層 (5)	石器のうつりかわり (6)	年代決定の方法 (9)
------------------	---------------	-------------

第二節 石器の製作と使用 — 最古のハイテク —	10
--------------------------	----

石器の石材 (12)	石材の産地 (13)	黒曜石 (14)	石器の製作 (15)
------------	------------	----------	------------

石器の種類 (18)	石器の使い方 (19)
------------	-------------

第三節 ヒトと自然のかかわり — ぐらしの基本 —	20
---------------------------	----

地形の変遷 (21)	関東地方の古地形 (23)	動植物 (24)	狩人のぐらし (29)
------------	---------------	----------	-------------

生業と食料 (32)

第四節	柏市の地域特性―遺跡・遺構・遺物―……………	34
	遺跡の分布と立地(34)	住居と集落(34)
		柏市の旧石器時代の遺構・遺物(36)
第五節	旧石器時代から縄文時代へ……………	41
	旧石器時代の終焉(41)	縄文時代のはじまり(45)
第二章	定住生活と土器のはじまり 縄文時代……………	49
第一節	手賀沼沿岸と縄文時代研究のあけぼの……………	49
	一 坪井正五郎と染谷大太郎の出会い(49)	
	二 岩井貝塚の収集資料と調査(53)	
第二節	定住集落の確立と展開……………	56
	一 古鬼怒湾岸の大規模集落群(56)	
	二 小山台遺跡の調査の成果(60)	
	三 縄文時代遺跡の分布(61)	
	四 縄文時代集落の変遷と多様性(64)	
	五 竪穴住居の多様性(80)	
	六 ムラを構成する施設・区域(85)	

第三節	古鬼怒湾・手賀沼沿岸の縄文土器……………	89
一	縄文土器のあらまし (89)	
二	縄文土器の移り変わり (92)	
第四節	縄文時代のくらし……………	108
一	縄文人の食料 (108)	
二	貝塚の形成 (110)	
三	採集・狩猟・漁撈の道具 (117)	
四	イノリ・マツリの道具 (120)	
五	埋葬・墓域 (130)	
六	遺物からみる交流 (132)	
第三章	農耕社会と国家の形成……………	134
第一節	手賀沼沿岸の弥生文化……………	134
	弥生時代観の変遷 (134) 手賀沼沿岸の弥生文化 (136)	
第二節	古墳時代への胎動 ―大交流拠点となった邪馬台国時代の手賀沼沿岸―……………	140
	弥生時代の文化的障壁となった手賀沼沿岸 (140)	

弥生時代後期の集落と鉄器の消滅 (141)	新しい環濠集落と古墳の登場 (142)
房総様式の土器が成立した場所 (144)	古墳の出現 (146)
古墳出現のころの房総 (147)	北上する房総の土器―異文化接触を求めて― (149)
第三節 古墳時代の首長と手賀沼沿岸の古墳……………	152
一 前期古墳の特徴 (152)	
二 中期古墳の特徴 (155)	
三 後期古墳の特徴 (157)	
四 墳輪について (166)	
第四節 古墳時代のくらしと手賀沼沿岸の遺跡……………	171
一 水辺のくらしと交通―手賀沼沿岸の集落景観― (171)	
二 道具からみたくらしの変化 (174)	
三 集落からみたくらしの変化 (180)	
第五節 手賀沼沿岸からみた国家形成……………	183
第四章 律令制による中央集権化と地方の変化……………	187
第一節 古墳時代から律令社会へ……………	187

国造の時代 (187)	中央集権への過程 (188)	地方制度と役所・官人 (189)
第二節 律令制下の柏	下総国と葛飾郡・相馬郡 (190)	東海道の変遷と茜津・於賦駅 (192)
遺跡からみる手賀沼沿岸地域 (193)	相馬郡家 (195)	
第三節 生活と税負担	倉麻郡意布郷 (相馬郡意部郷) の戸籍 (196)	税を負担する人びと (199)
第四節 村落の展開	手賀沼沿岸の村落のあり方 (202)	大井郡の村落 (204)
第五節 仏教の浸透	地方への仏教の広がりとは造寺 (206)	国分寺以前の寺 (207)
		村落内の仏教 (207)
第六節 鉄の生産	生産活動と製鉄遺跡 (210)	手賀沼沿岸での製鉄の特質 (210)
第七節 平将門・平忠常の乱	平将門の乱 (214)	将門の王城と相馬郡大井津 (216)
	平忠常の乱 (220)	平忠常と相馬郡 (222)
		源義家の奥州への道 (223)
		将門伝説 (218)

第二編 中世編

第一章 武家の時代のはじまり

227

第一節 相馬御厨の成立と両総平氏

227

伊勢神宮と御厨(227) 布瀬・墨埜御厨から相馬御厨へ(228) 御厨をめぐる争い(229)

御厨の範囲(231)

第二節 鎌倉開府と千葉一族

232

源頼朝の挙兵と千葉一族(232) 千葉氏と下総藤原氏(233) 佐竹氏と片岡氏(234)

頼朝の奥羽侵攻と相馬氏の誕生(235) 相馬氏の本拠(236)

第三節 相馬一族と幕政の進展

237

相馬義胤と幕政(237) 義胤の兄弟(238) 義胤と新田岩松氏(239)

相馬胤綱の婚姻関係(239) 石見国守護相馬胤綱(240)

第四節 得宗専制と相馬一族

242

寛元・宝治の政変と房総(242) 家督相続をめぐる相馬氏の内紛(243)

増尾・薩間・栗野・泉の伝領(244) 藤心・手賀・布瀬の伝領(245)

所領をめぐる紛争(246) 相馬氏の奥州移住(247)

第二章 鎌倉府の時代……………249

第一節 南北朝期の内乱と相馬氏……………249

鎌倉幕府の滅亡と相馬一族 (249) 建武政府と相馬一族 (250)

尊氏の自立と相馬一族 (250) 南北朝期の争乱 (251) 相馬郡と相馬一族 (252)

第二節 鎌倉府の確立と千葉氏……………254

鎌倉府の成立 (254) 侍所千葉氏 (255) 奉公衆の沼南地域入部 (258)

第三節 相馬御厨と伊勢神宮……………260

相馬氏と伊勢神宮 (260) 外宮神官が継承した御厨口入職・使得分 (261)

伊勢外宮の御厨支配 (262) 伊勢内宮の御厨支配 (264)

第四節 争乱の時代と千葉氏……………265

永享の乱と千葉氏 (265) 結城合戦と千葉氏 (266) 千葉胤直と沼南地域 (268)

第三章 戦国の動乱……………271

第一節 原氏の成立……………271

戦国時代の幕開け (271) 下総原氏の出自 (272)

第二節 千葉氏の分裂と原氏の動向……………	274
千葉氏の分裂(274) 馬加康胤・原胤房の討死(277)	
第三節 太田道灌の影響……………	280
長尾景春の乱(280) 境根原合戦(283) 都鄙合体(284)	
第四節 手賀原氏の成立……………	285
原氏の沼南地域への進出(285) 原胤隆と布川(286) 胤親・久胤父子と手賀出雲(287)	
第五節 小田原北条氏の進出……………	289
北条氏の関東進出(289) 北条氏の房総進出(290) 第一次国府台合戦(292)	
天文期の下総(293)	
第六節 上杉謙信の襲来……………	295
千葉胤富の家督相続(295) 上杉謙信の越山と房総の国衆(296)	
第二次国府台合戦(297) 上杉謙信による白井城攻め(299)	
第七節 小金高城氏と沼南……………	300
小金高城氏の登場(300) 高城胤吉と小田原北条氏(301) 胤吉から胤辰へ(303)	
北条氏の滅亡と高城胤則(304)	

第四章 沼南の中世社会

第一節 郷村のようす

沼南地域の郷村 (306) 郷村の田 (310) 郷村の住人 (310)

第二節 手賀沼をめぐる交通

相馬御厨の年貢輸送 (311) 往来する「熱海船」 (312) 板碑の搬送と水上交通 (313)

河川をめぐる争い (314)

第三節 『本土寺過去帳』のなかの沼南

『本土寺過去帳』とは (316) 年号 (317) 寺院・住人 (318) 戦い (320)

第四節 中世の石造物

沼南地域の中世石塔 (321) 板碑 (322) 板碑の本尊 (323) 下総型板碑 (324)

題目板碑 (324) 民間信仰板碑 (325) 月待供養板碑 (325) 庚申待供養板碑 (326)

五輪塔 (327) 車ノ前五輪塔 (328) 宝篋印塔 (328) 箕輪城出土宝篋印塔基礎 (329)

第五節 文化財にみる中世の信仰

沼南地域の文化財 (329) 木造薬師如来坐像 (329)

木造聖観音菩薩坐像と「妙法蓮華経」版木 (330) 文正二年銘銅鐘 (330)

紙本墨書十界曼荼羅 (331)

第六節 失われた沼南の城館跡…………… 331

鷺野谷城跡 (331) 藤ヶ谷城跡 (334) 塚崎殿山 (335)

第七節 沼南地域城館関係の周辺遺構、伝承・地名など…………… 336

大井追花城跡関連 (336) 箕輪城跡関連 (336) 岩井屋敷 (338) 手賀城関連 (338)

布瀬高野館跡関連 (339)

第三編 近世編

第一章 近世村の成立…………… 343

第一節 一七の村むらが独立した…………… 343

手賀沼と「落し」と「谷津」 (344) 手賀の一〇か村 (345) 風早の七か村 (348)

第二節 手賀原氏と染谷治右衛門の近世…………… 350

中世土豪侍たちの帰農 (350) 手賀原氏と原胤昭 (351)

第三節 名前を獲得する百姓たち…………… 352

検地を受ける村むら (352) 検地帳の名前 (353) 燃え残った検地帳 (354)

元和六年鷲野谷村検地 (356)	大井村の元和検地写し (357)	
第四節 田中藩本多氏の支配と旗本領		359
田中藩の下総飛び地領 (359)		
第二章 村のくらし		362
第一節 村の産業―農業と農間渡世		362
村の仕事 (362)	商人組合と職人 (367)	さまざまな職業 (368)
第二節 人口と家族		370
村のくらしとライフコース (370)	村の人口と世帯 (371)	
村の結婚と出産・そして離婚 (373)	病と医師 (376)	村人の移動理由と移動圏 (377)
奉公 (378)	家出 (378)	食事 (379)
第三節 揉めごととむすびつき		380
出入と争論 (380)	さまざまな揉めごと (383)	幕末の騒擾 (386)
		講 (387)
第四節 飢饉とお救い		388
沼南地域の災害 (388)	天明の飢饉 (390)	文政の早魃と洪水 (391)
嘉永の早魃 (395)	安政の災害 (395)	災害への備えとお救い (396)
		天保の飢饉 (391)

第五節	娯楽・文化・旅と信仰……………	397
	江戸時代の娯楽と信仰 (397)	俳諧 (398)
	寺と神社 (400)	いろいろな旅 (402)
第三章	手賀沼開発の虚実……………	406
第一節	利根川をめぐる内陸水運と手賀沼……………	406
	手賀沼と利根川の接点 (406)	無理だった新利根川の開削 (409)
	内川廻し (内陸水運) の成立 (411)	
第二節	江戸商人たちの寛文期開発……………	412
	寛文期の新田開発 (412)	
第三節	享保期手賀沼開発の虚実……………	417
	『東葛飾郡誌』の功罪 (417)	井澤弥惣兵衛伝説の形成 (421)
	木下河岸「吉岡家旧記」と井澤伝説 (423)	地方史料による井澤伝説の形成 (424)
	幕末期の手賀沼開発をめぐる (426)	入会漁業の成立 (429)
	手賀沼開発史年表 (431)	
第四章	小金牧・鷹場付きの村むら……………	436

第一節	小金牧の成立と将軍の鹿狩	436
	野馬と村びとの共生 (436)	
	小金・佐倉牧の成立 (440)	
	享保期吉宗の牧再開発 (441)	
第二節	野付村のくらし	444
	神様とあがめられた岩本石見守 (444)	
	善龍寺一件・牧人足輕減運動 (445)	
	小金牧の人足負担輕減運動 (446)	
第三節	将軍の鹿狩りと村むら	448
	享保一〇年 (二七二五) 八代将軍吉宗の鹿狩り (450)	
	一二代将軍家齊の鹿狩り (451)	
	一二代将軍家慶の鹿狩り (452)	
第四節	鷹場村のくらし	454
	水戸藩の鷹場 (454)	
	沼南地域の鷹場村 (456)	
	重い負担と解放運動 (457)	
第五節	戊辰戦争と小金牧開墾の始まり	459
	東山道軍と小金牧開発 (459)	
第五章	陸の交通・水の交通	463
第一節	水戸街道	463
	水戸街道 (463)	
	街道を通った人と物 (467)	

第二節 鮮魚街道……………	467
---------------	-----

魚を運ぶ(467) 布佐河岸から松戸河岸へ(468) 元文二年の石橋(469)

農民の出入り(470) 金毘羅堂と大沼枕山碑(471) 藤ヶ谷常夜灯を建てた人びと(471)

天然氷を使った鮮魚輸送(472)

第三節 村の道……………	474
--------------	-----

沼南地域の道筋(474) 高柳村の道筋(476) 道の普請(477) 橋の普請(478)

千間堤への架橋(479)

第四節 手賀沼の小船と舟運……………	481
--------------------	-----

沼役永(481) 小船の所持(483) 川船改め(484) 手賀沼の舟運(485)

第六章 領主支配の動揺と幕末維新期の社会……………	488
---------------------------	-----

第一節 田中藩の財政事情……………	488
-------------------	-----

下総領の年貢(488) 先納金・御用金の賦課(489) 嘉永三年の改革(492)

長寿講(493)

第二節 旗本松前氏の勝手賄……………	495
--------------------	-----

財政の困窮(495) 年貢の勘定(496) 村による勝手賄(498) 松前本家の関与(499)

鹿嶋屋が金主となる (500)	契約の破綻 (501)	503
第三節 村社会の変容と治安の悪化		503
潰百姓と本百姓の取立て (503)	無宿人の横行 (505)	
浪人の徘徊 (507)	浪人との契約 (508)	
第四節 ペリー来航と田中藩下総領の人びと		510
夫役人足や拵足輕の徴発 (510)	ペリー来航 (512)	
農兵の登用 (513)		
藩邸への張訴 (514)	村びとの情報収集 (516)	
第五節 幕末維新期の田中藩		518
加村台屋敷の建設 (518)	天狗騒乱 (521)	
長尾への移封 (525)		
第六節 芳野金陵と弟子たち		527
金陵の時代 (527)	教えを受けた人びと (529)	
染谷治右衛門と大太郎 (530)		
第四編 近現代編		
第一章 近代の黎明		537
第一節 明治前期の行政		537

	明治初年の沼南 (537)	行政組織の変遷 (538)	地租改正 (542)
第二節	風早村・手賀村の成立	547	
	町村制の施行 (547)	村の運営 (550)	政治の始まり (551)
			県会・帝国議会 (554)
第三節	産業と交通・運輸	558	
	『偵察録』にみる産業 (558)	農会と農事改良 (561)	氷冷舎の天然氷製造 (563)
	二つの道路 (565)		
第四節	社会と生活	568	
	村内の医師 (568)	伝染病予防対策 (570)	神仏分離と寺社 (573)
	手賀教会とニコライ神父の布教活動 (574)		
第五節	明治の戦争と地域	577	
	徴兵令 (577)	西南戦争 (577)	徴兵制の定着 (580)
			日清戦争の従軍者 (581)
	祝捷会と葬儀 (582)	日露戦争による大量動員 (584)	「銃後」の組織化 (586)
第六節	近代教育のはじまり	588	
	小学校の設置 (588)	就学率の上昇 (592)	教育の統制 (596)
第二章	村政の展開と戦争	600	

第一節 村政史料からみた村……………	600
第一次世界大戦の影響(600) 国勢調査にみる村の人口実態(601)	
大正期の財政状況(602) 民力涵養と村(603) 村の一体化(604)	
明治・大正期の議員選挙(605) 普通選挙期の選挙分析(606) 県会議員選挙(608)	
手賀村の政治的混乱(609)	
第二節 戦時体制への傾斜……………	610
昭和恐慌の影響(610) 昭和期の財政状況(610) 満州事変以後の社会の転換(612)	
都市計画区域への編入(614) 戦時体制の整備(614) 藤ヶ谷飛行場と部隊の駐屯(615)	
敵機襲来(618)	
第三節 大正・昭和戦前期の交通……………	619
幻に終わった船橋鉄道(619) 北総鉄道船橋線の開通(620)	
上印人車軌道の敷設計画(622) 道路の整備(623)	
第四節 大正・昭和戦前期の産業……………	625
農業の多様化と諸産業(625) 農業経営の様子(627) 米穀検査と地主会(630)	
小作争議と協行組合(631) 農事改良の進展(632) 東京方面への行商(635)	

昭和恐慌と農業 (636)	戦争と農業 (638)
第五節 社会と生活……………	640
大正・昭和戦前期の伝染病 (640)	乳幼児の保護と衛生 (642)
結核予防と青年層の体力増強対策 (643)	関東大震災と地域 (645)
第六節 生活文化の向上とゆかりの人びと……………	647
電灯の普及 (647)	郵便局の新設 (650)
	沼南ゆかりの人びと (652)
	大町桂月 (653)
山崎弁栄 (655)	原胤昭 (656)
	杉村楚人冠 (657)
第七節 軍と「銃後」……………	659
在郷軍人会の発足 (659)	村役場・在郷軍人分会・青年訓練所 (660)
満州事変と「非常時」 (663)	日中戦争と総力戦体制 (665)
	アジア太平洋戦争 (666)
「銃後」の生活 (669)	復員と敗戦処理 (670)
第八節 青年教育の拡充と手賀村の小学校問題……………	672
青年夜学会の開催 (672)	実業補習学校と青年訓練所 (674)
手賀村を揺るがす小学校問題 (677)	混迷を深める小学校問題 (679)
戦時下の教育 (681)	

第三章 復興と変貌	684
第一節 村の行財政と町村合併	684
公選村長 (684)	
村の財政状況 (685)	
合併への道 (688)	
新しい村の出発 (690)	
新村建設の見通し (693)	
第二節 町制施行から柏市合併へ	695
新庁舎建設問題 (695)	
町制施行 (696)	
「太陽と緑と水の美しい田園都市」をめざして (698)	
柏市合併へ (701)	
第三節 戦後農業の変遷	703
戦後の食糧事情 (703)	
農地改革と農村の民主化 (704)	
農業の近代化 (705)	
近郊農業の振興 (707)	
第四節 新しい生活と都市化の進展	710
新生活運動 (710)	
沼南村の生活改善 (711)	
都市化の始まり (713)	
交通網の整備 (714)	
工業団地の造成 (716)	
大津ヶ丘団地の建設 (717)	
町の変貌 (720)	
第五節 基地と地域の人びと	722

藤ヶ谷飛行場 (722)	米軍白井基地 (723)	基地問題への取り組み (724)
海上自衛隊下総航空基地 (727)		

第六節 戦後教育の出發	730
-------------	-----

教育の民主化 (730)	地域の変貌への対応 (733)	社会教育の充実 (735)
--------------	-----------------	---------------

第四章 手賀沼	737
---------	-----

第一節 手賀沼の漁業・鳥猟と渡船	737
------------------	-----

漁業・干拓計画のなかで (737)	鰻と鯉 (740)	漁法 (740)	鳥猟 (741)
-------------------	-----------	----------	----------

手賀沼の渡船 (742)	水難と中秋丸就航 (743)	手賀大橋 (744)
--------------	----------------	------------

第二節 手賀沼干拓計画と田園都市への模索	745
----------------------	-----

明治期の水害と手賀沼・利根川改修 (745)	千葉県による耕地整理計画 (747)
------------------------	--------------------

国営干拓計画 (748)	手賀沼保勝会 (750)
--------------	--------------

県立公園の指定と幻の東京オリンピック (752)

一三年・一六年水害と昭和放水路計画 (754)

第三節 戦後干拓と手賀沼の変貌	756
-----------------	-----

戦後干拓の経過 (756)	手賀沼単独での干拓へ (757)	沿岸観光開発計画 (759)
---------------	------------------	----------------

第五編 民俗編

人口急増と手賀沼汚染 (762) 汚染対策と北千葉導水 (763)

第一章 沼南地域の民俗

第一節 概 論

イエとくらし (770) まつりと講ごと (772) 沼となりわい (777)
 娯楽とたのしみ (778) 武道 (778) 娯楽 (779) その他 (780)

第二節 送り大師

はじめに (781) 開創 (782) 変遷 (784) 巡行 (786) 結願 (789) 規約 (791)

第三節 沼南地域に残るオビシヤの原初形態

オビシヤとは (792) 鳥ビシヤ (794) 三本足のカラスの的 (796)
 射日神話と招日神話 (797) 三本足のカラスを射る意味 (800)
 沼南地域の天道念仏 (800) 大日祭り絵馬 (802)

769 769 781 792

目 次

挿図・表の出典及び写真一覧

参考文献一覧

執筆者一覧（文責）

柏市史編さん関係者

あとがき